

武蔵野日曜聖書講筈

イエスの受洗と授洗

——マタイ伝第3章1～17節——

1993年3月28日

小池辰雄

ひつくり返れ 非連続の連続 キリスト真道 十字架と聖霊 聖霊鳩のごとく 気が合っている者 宇宙的なひと

【マタイ3】

1 その頃、バプテスマのヨハネ来りユダヤの荒野にて教を宣べて言う、

2 『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』 3 これ預言者イザヤによりて、斯く云われし人なり。曰く、『荒野に呼わる者の声す「主の道を備え、その路すじを直くせよ」 4 このヨハネは駱駝の毛織衣をまとい、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食とせり、 5 ここにエルサレム及びユダヤ全国、またヨルダンの辺なる全地方の人々、ヨハネの許に出できたり、 6 罪を言い表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。 7 ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言う『蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。 8 さらば悔改に相応しき果を結べ。 9 汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言わんと思ふな。我なんじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起こし得給うなり。 10 斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。 11 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。 12 手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麦は倉に納め、穀は消えぬ火にて焼きつくさん』 49 我は火を投ぜんために来たれり。

13 ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに来り給う。 14 ヨハネ之を止めんとて言う『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に来り給うか』 15 イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』 ヨハネすなわち許せり。 16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。 17



また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』

● ひっくり返れ

マタイというのは取税人だったけれども、キリストに

「ついて来い」

と言われたら、

「はいっ」

と言ってついて行つた。それで十二使徒の一人になってしまった。それで『マタイ伝』と
いうのができた。マタイ伝第3章、

1 『その頃バプテスマのヨハネ来りユダヤの荒野にて教を宣べて言う、

2 『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』

マタイ伝では「神の国」とはいわないで、「天国（バシレイア ウーラノー）」と言っている。「バシレイア」というギリシア語は「王国」という意味です。神さまは最大の王者です。福音の世界は王国なんだ、共和国ではない。「悔改（メタノイア）」という言葉はひっくり返り、方向転換という字です。

「心も身体も方向転換しろ」

ということ。それが悔改です。「悔改」という言い方は少し消極的な言い方だ。悔いて改めるのではなくて、

「方向転換しろ」

ということですよ。

「自己本位だったのを神本位に転じ、自分を見ないで、神・キリストを見る」

と、これが「悔改」です。

「天国は近づいた」

というのは、

「天国体なるキリストがやって来たから、天国は近づいた」

ということですよ。だから、ヨハネはキリストの先駆者として、イエスを指し示しているわけですよ。

「水に入って、方向転換しろ」

と言った。頭から水をたらすのではなくて、水の中にとっぷり浸る浸礼です。水に入るいわゆる潔めというのは東西で共通なものがあります。

3 『これ預言者イザヤによりて、斯く云われし人なり。曰く『荒野に呼ばれる者

の声す

』斯く云われし人なり』というのは、そういう先駆者がやって来る、ヨハネみたいなのが出てくるぞ、ということ。



「荒野に呼ばれる者の声す」

というのはイザヤ書40章に書いてある。第二イザヤです。

「主の道を備え、その路すじを直くせよ」

ゴタゴタしているものを全部廃して通りやすくしろと。そういうことが預言してある。捕囚の民がエルサレムに帰る時の話です。やがてそういう期がまた来るということです。

4 このヨハネは駱駝の毛織衣をまとい、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食とせり、

非常に原始的な生活です。大体、坊さんたちがそうだ。お布施で動いている。「栄養がどうだこうだ」なんて、そんなことばかり考えているのはダメなんだ。

「何を食い、何を飲まんと、思い煩うなかれ」

とキリストが言われた。魂が本当に生きていると、食べ物や霊的な力をもって食べられるようになる。ところが、根性が曲がってたりいろいろんことを考えたりしていると、いくらご馳走を食べたって、本当は身につかない。

そういう洗礼のヨハネが現れて、

「水にとつぷり浸かつて方向転換しろ」

と呼ばわった。

5 ここにエルサレム及びユダヤ全国、またヨルダンの辺なる全地方の人々、

ヨハネの許に出できたり、

「そうか、そういうことなら行きましょ」

というわけで集まって来た。ヨルダンの東側からもやってきた。

6 罪を言い表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。

「私はこういうことをしました。間違っていました」

と、やっているわけだ。使徒行伝19章にも、そういうたようなことが書いてある。

7 ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言う「蝮の裔よ、

「お前たちは蝮の裔だ」

とはつきり凄いことを言ったものだ。「パリサイ人」というのは旧約の律法を大いに自分は知っている、またそれを行なっていると自分で、自己義認している連中です。「パリサイ」というのは「分かれたるもの」という意味です。

「自分たちは普通のやつとは違うんだ、別な人間だ」

と、自己主張の自己義認なんだ。「サドカイ」というのはレビ人サドクの族で、これは執成しの方で、多少文化人的な、この世的な文化文明の方です。まだサドカイの方が少しは御しやすいわけです。ところが、「両方ともダメだ」と。

誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。



「キリストの怒りが来るのに、お前たちは来たってダメだ、本当の悔改めなんかできやしない。審判を避けられないんだぞ」

と。「キリストの怒り」とは、義の角度から人を審くことが「怒り」なんです。キリストの審判です。

⁸さらば悔改に相応しき果を結べ。

悔改めに相応しき果を結ぶなら、

「よし、お前たちはそれだけ違った生き方になったか。それなら認めてやるぞ」と。

●非連続の連続

9 汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言わんと思うな。我な

んじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給うなり。

「私たちは血統的にアブラハムの子でユダヤ人だから、普通と違うんだと言っても、そんなことではないんだ」

と。霊統というものは血統と違う。これは非連続の連続です。霊統は非連続の連続ですけれども、仏教の方に「法嗣」という言葉がある。師の言ったことを弟子がつかないでいく。仏法はそのようにして伝わっていく。法然の言ったことは親鸞はそのまま受けとって伝えていった。親鸞も、

「たとえ法然に騙されても、自分はその道に行く。地獄へ行くか極楽に行くか知らん。とにかく、自分はその道を行くんだ」

と言った。あれは素晴らしい言葉です。救いのためでも何でもない。ただ法を受けとって、

「その法を受けとって歩いていくことが地獄へ行くのなら、それは一向差し支ええない。そんなことは私の存ぜぬことである」

なんて言っている。

だから、私がこうやって皆さんと福音の伝道をやっているんだが、それは本当にあなた方一人ひとりがそれを受け継いでやってくださらなくては。それだけの使命を皆さんは担っておられる。たとえ一人でもいい。この頃はだいたい人数が少ないようだが、一向差し支えない。いい加減な人が何人いたってダメだ。本ものだったら、いくら少なくてもいい。

結局、本ものは少ない。キリストの本当の弟子も五人いたかないかだ。その最たるものはキリストを知ってたか知らないかわからない。パウロなんてのは、復活のキリストにひっくり返された。それで、パウロは目がさめた。本当の福音の受け継ぎ者はこのパウロだ。そういうもんだ。その人が死んだ後で、初めてその真価がわかって、

「よし、私はその道に行く」

というわけだ。真理はそれ自らが必ず勝っていく、継いでいく、続いていく。それは真理



の力なんです。理といたって、ただ理屈ではない。「アレタイア(真)」の力がそれなんです。

●キリスト真道

「福音(エヴァンゲリオン)」という言葉は「楽しきおとずれ」なんだけれども、私は「福音」という言葉はあまり好きではない。「キリスト道」の方がよほどよい。福音を目安にしているのは本当の宗教ではない。福音の世界は幸福論ではない。道なんです。真道、まことの道、キリスト真道です。福音なんて、いい気になっていっているものではないんだ。

仏道でも

「それは一般のものには逆らう」

とはつきり言ってます。仏道にしろキリスト道にしろ、本当の道は言い逆らいの道なんだ。一般の人たちの歩き方とは、生き方とは違う。だから、何のかんと言われる。仕方がない、言われたって。本ものだから。

本当の本ものは人を批判しません、批判したってしょうがないから。みんな包摂してしまふ、包んでしまふ。白隠なんてのは、何でも

「ああ、よしよし」

なんて言っている。白隠も偉い坊さんだ。むしろ、日本の仏道の中に素晴らしい人がいて、キリスト教の方にはそういう人が滅多にいない。むしろダメなんだ。賀川豊彦は素晴らしい。キリスト道を本当に生きた人だ。

だから真道、真の道なんだ。真理でない。「真理」という言葉は何か観念的に響く。聖者、聖というけれども、「真」という字は素晴らしい字だ。本ものだ。本当の道、真道、霊道、霊の道です。一般に「キリストの福音」というから、使いますけれども、福音という言葉は本当はあまりいい言葉ではない。ギリシア語でも「エヴァンゲリオン」というけれども、キリスト自身は「エヴァンゲリオン」なんて言わなかった。「わが道」と言った。

「我は道なり」

と言った。「我は福音なり」とは言っていない。「道(ホ・ドス)」なんだ。キリスト教ではなく、キリスト道だ。

●十字架と聖霊

10 斧おのははや樹きの根に置かる。されば凡すべて善き果を結ばぬ樹は、伐きられて火に投げ入れらるべし。11 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施ほどこす。されど我より後にきたる者は、我よりも能力ちからあり、我はその鞋くつをとるにも足たらず、

「鞋くつの紐ひもを解いたりするのは奴隷のやることだが、その奴隷の仕事にすらも自分は働かない」と。



彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。

「聖霊と火」といったって、これは聖霊の火だ。いい加減なもののみな焼きつくしてしまおう。聖霊は水でもあるし、火でもある。水に譬えたり、火にたとえたりする。

「聖霊でバプテスマをする人だ」

と、ちゃんとはつきり言っている。

12 手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麦は倉に納め、殻は消えぬ火にて焼きつくさん』

本当に悔改めないと、そのようにみんな焼かれてしまうぞ、と。

キリストは、ルカ伝12章49節でも

「49 我は火を投ぜんために来れり。」

と言っておられる。「火」は聖霊のことです。

「聖霊の火を投ぜんために来た。けれども、思い迫ること如何ばかりぞや。自分には受くべき別のバプテスマがある。十字架でもって贖罪を、本当の潔めをしたら、今度は、火を投するぞ」

と。その「火を投じ」たのはペンテコステになる。

とにかく、キリストの言い逆らしいの徴である十字架にみな躓く。キリスト道の徴は「〇に十」

の徴です。十字架と聖霊です。パウロが言っている通り、

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず」

その次にパウロは何と言ったかというところ

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と、これは聖霊の世界です。聖霊のキリストが、キリストの聖霊がわがうちで生きている。あのパウロのガラテヤ書2章20節は、十字架と聖霊を、両方ともちゃんと言っている。

●聖霊鳩のいづく

ところで、キリストがやって来た。

13 ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給う。14 ヨハネ之を止めんとて言う『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給うか』

「逆ではありませんか」と。

15 イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』ヨハネすなわち許せり。

ヨハネは、「それでは、そうしてください」と。

16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、



神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。

悔改めの必要のないイエスが、方向転換の必要のないイエスが水の中に入った。イエスという人は我々と同じ罪びとの姿でやって来た。天界のキリストが、「ロゴス・キリスト」が「サルクス・キリスト」として、我々と同じ罪を犯す可能性のある存在としてやって来た。キリストは、現実には罪を犯さなければ、可能性は持っていた。我々と同じ人間だから、その可能性のある不確かな人間だから、

「だから、私は悔改のバプテスマを受けるんだよ」

と。悔改めの材料はないけれども、可能性はあるから受けるんだと。ところが、可能性のあるキリストが受けたら今度は——それは悔改めの必要がないものだから——水から上がってきたら、聖霊が臨んでしまった。キリストのバプテスマの時は、そこに別の現象が起きた。

天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。

と。大変なひとです、聖霊によって生まれた霊止だから。

私は語りながら、あなた方は聞きながら——語るも聞くも同じこと——御霊が鳩のごとく降ってきて、集会の終りの頃にはもう聖霊に満ちている。雑念は一つもない。人に何と思われようと一向差し支えない。私たちは生命賭けで集会をしている。皆さんは、遠きを厭わずにやって来られるのは、そういう現実には毎回、一緒になって入っていくためです。

これは不信の世界に対する戦いです。神無き民主主義ではダメなんだ。日本の民主主義は、

「神さまの下に（アンダー ゴッド）」

ではない。リンカーンはちゃんと「アンダー ゴッド」と言った。

●気が合っている者

17 また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』

「本当にこの子は気が合う」

と。「悦ぶ者」という言葉の本当の意味は「気が合う」ということなんです。

「魂、心がピタリと合う、本当に気が合っている者だ」

ということ。キリストは神さまに気が合っている。直訳すると、

「わが愛せられたる息子、この人において自分は気が合っている者」

「愛せられたる者、気の合っている者」を日本語では、

「愛しむ者、悦ぶ者」

と訳している。「悦ぶ」でもいいけれども、「気に入っている」という意味です。

●宇宙的なひと

そういう声がかから響いてきた。キリストはそのようにして、水に浸って出てきたら、



聖霊が臨んできた。我々はそれができない。十字架を受けとって——水の潔めではない——十字架で自我をすつ飛ばされる。根底において自我がすつ飛ばされると、即ち、罪びとでありながら同時に罪なき無者である。我々は十字架で無者なんだ。この無者には聖霊が臨んで、即無限無量者になる。聖霊が臨むと、無者即無限無量者になる。無限無量の性質が入ってくる。宇宙人だ、宇宙的なひと。穹蒼おほぞらのごとく大海のごとしというわけだ。聖霊の人は宇宙人だ。仏の世界でもそうなんです。南無阿弥陀仏の世界に本当に入ると、これは宇宙的になる。同じです。羽がなくても宇宙を飛び回っているようなことになる。

自動車みたいに軌道に載って動くのではない。無軌道の世界、空中を飛ぶ鳥のように。だから、我々は鳥の如く飛翔している。クリスチャンは道なき道を歩く。無道の道という。それが本当の道である。鳥というものはいいものだ。風につて、プロペラも何もありません。たいしたものだ、鳥の羽というものは。

キリストは

「我は道なり、神の道なり」と言った。

「自分は神さまの道だ、概念的に限定なんかできる道ではない。説明なんかできるものではないぞ」ということ。

「キリスト教はああだ、こうだ」

なんて、いろいろな説明をする。しかし、キリストの言葉は、その行為はいかに自由であるか。理屈ではなかった、ということですよ。

本当の厳しさの中に本当の楽しさがある。厳しさをもたない楽しさなんて、そんなのは甘ったるくてダメなんだ。

